

## 序

愛知大学人文社会学研究所は、発足二年目を迎え、やっとその名にふさわしい事業の展開に向けて動きはじめました。所員間のみならず、外部の研究者とも交流を持ちながら、研究の内容を問い直し、その質を高め、これを発信していくための試みがなされております。常識や価値観を構成する言葉と「知」の内容を相対化し、私たち一人ひとりにとってふさわしい社会を構想することが、その責務であると考えているからに他なりません。

ここには、世に人文学といわれるものが、学問の自由のもと、真・善・美を追求するといいつつ、その目的についてはあまり議論されていない、という現状認識があります。存在意義の批判的考察を等閑視してきたため、これまでの人文学は、社会をかたちづくってきた権力や権威による秩序形成に奉仕し、その暴走に何ら歯止めをかけることができずに行きました。

我われの知識やこれを構成する言葉、つまり人文知やそれに感情さえも、自然にできあがったもの一つもない、必ずある意図のもとに、誰かの力をはたらいで、これらは形成されているという観点にたつて、まずはその成り立ちを明らかにしたい。そして「客観的」とか「事実」とか、「真実」とか、あるいは「科学的」という言葉で隠されてしまっている

「知」の意味を、そこに働いている力の在り処とともに、白日のものと曝していく。次いで、普遍的価値である自由・人権・平等などの内容・構造を、いま一度問い直してみる。と同時に、国家の原理が、こうした理念の発動を制約している現実を見定めたい。こうすることによって、ネイションのために構築された一九世紀的学問を超えるべく、自分を読み、トランスナショナルな人文知の体系を追求していく、というのが本研究所の活動方針であります。

本書は、こうした趣旨に則って、外部から研究者を三人お招きし、二〇一六年一〇月一五日、愛知大学豊橋キャンパスで開催された、ワークショップ「南伝上座仏教と現代」の成果を収録したものです。

冒頭の問題提起に続き、藤本先生による、日本の仏教と南伝上座仏教の違い、すなわち南伝上座仏教を下敷きにすると、日本の仏教はどのように見えてくるのかというお話からはじまります。次に、林先生には、「南伝上座仏教徒の社会である」といわれているタイでは、宗教がどのように実践されているのか、それが我われの有する宗教知の構造をどのように暴くかの、そして小島先生による、ミャンマーのエスニック・マイノリティであるバラウン族を例にとった、エスニシティと宗教との関係についての、ご報告となっております。最後に、これらを踏まえ、参加者も交えた、総合討論も収めました。

いずれの先生からも、現場に身を置き、自分の足で歩き、目でみて、肌で感じ、自省を重

ねた結果が、開陳されました。人びとに癒しと救いをもたらすために生み出された宗教が、争いの原因になってしまっているのは、現代に生きる私たちが宗教に何を求めているからなのか。このことを、南伝上座仏教の精神に照らして考えてみたいと思っております。